

日本人帰国子女の第二言語喪失：冠詞誤用と他者の「前提性」理解

友田 路

要旨

This study investigates L2-attributed young returnees' ability to apply their knowledge of articles in listening tasks in L2. In addition, the present study examines whether subjects were able to read others' mind in terms of understanding presupposedness in the use of articles. Subjects were required to conduct short story-based listening tasks and false-belief tasks. Following this, subjects meta-linguistically expressed their reasons for the choices of answers. Results for the listening tasks showed that subjects were generally able to complete the tasks successfully but meta-linguistically disclosed that they primarily relied on other clues other than article rules for their answer choices. In terms of subjects' awareness of presupposedness, five participants out of sixteen subjects failed to complete the false-belief task in L2. Despite this, they demonstrated an understanding of the concept of presupposedness, and that they mistook the intention of the false-belief task which led to errors in completing the task successfully. In conclusion, although subjects had a high understanding of the article system, they did not rely upon it for completing both tasks, instead they utilized other clues, which could be an indication of L2 attrition.

キーワード：帰国子女，第二言語喪失，他者理解，誤信念課題，冠詞

1. はじめに

Andersen が 1982 年に提唱した言語喪失研究が、初めて個人の言語技能の喪失に着目し、「喪失は習得の順の逆をたどる」として、言語獲得と言語喪失が鏡像関係にあることを示したことはよく知られている。言語獲得の何に照準を合わせて喪失順序の根拠とすべきかについては、議論が分かれるところではあるが (Bahrick, 1984; Berko-Gleason, 1982; Weltens & Cohen, 1989)、幼児期や学齢期を海外で過ごした帰国子女の場合、「最後に学んだことを最初に忘れる」とする退行仮説 (Jakobson, 1968) を採用し、帰国後の L2 喪失が母語話者幼児・児童の言語獲得の習得順序と鏡像関係になると仮定する研究が多い (Cohen, 1975; Olshtain, 1989; Reetz-Kurashige, 1999; 友田, 2007, 2008)。

退行仮説の研究対象となる言語要素に関しては、帰国子女の言語喪失研究の多くが発

話中の不規則動詞の屈折に着目している。しかしながら、友田（2007）が指摘するように、動詞の屈折を対象とした場合、L2 能力をある程度保持している年少児童の発話には、帰国後の期間が長くなっても多くの動詞の屈折が見られるのに対し、L2 保持がそれほど高くない年少児童は、動詞の発話そのものを省略するだけでなく、文法的に正しく使用出来る動詞に固執して発話する傾向があるため、見かけ上文法の正確さを示す数値¹⁾が上昇を示すなど、その言語変化の細かい推移を見極めるのは極めて難しい。これを踏まえ友田（2008）では、動詞の屈折の代わりに冠詞を採用し、より細かい言語変化を縦断的にとらえる可能性を探っている。冠詞は種類が少ない上に発話中の使用頻度も高く、帰国児童・生徒にとって馴染み深い形態素であることに加え、英語母語話者幼児の冠詞習得順序が、発達心理学的な視点を踏まえた「4 段階仮説（Four-stage 仮説）」として知られているため（Cziko, 1988; Thomas, 1989）、鏡像関係としての喪失順序が予測しやすいからである。この縦断的調査から、程度の差こそあれ、帰国子女の冠詞使用が4 段階仮説を逆行することが示唆された（友田, 2008）が、そのような退行が、(1) 冠詞の基本的なルールの認識不足によるものなのか、(2) 冠詞の基本的なルールは理解出来てはいても、L2 能力の喪失のために、例えば L2 発話の際に正しい冠詞使用にまで判断力や注意力が行き渡らないトレードオフ効果²⁾の結果等によるものなのか、(3) 冠詞使用に不可欠な「話し手による『聞き手の前提性の理解』の判断」（Bickerton, 1981, 1984; Cziko, 1988; Thomas, 1989）が L1 では問題がなくとも L2 では難しいためなのか、あるいは (4) 正しい冠詞使用に必要な「他者の前提性の理解」そのものが、L1 でも L2 でも一様に困難であるためによるものなのかについては、明確にされてはいない。

そこで本稿では、上記の縦断的調査結果の補足のため、被験者数を増やした横断的調査を実施し、退行現象によって顕在化された帰国子女の冠詞誤用が、どのようにして起きるのかを探ることとする。

2. 先行研究

2. 1 4 段階仮説

帰国子女の冠詞使用変化の前提とした4 段階仮説によると、子どもの心理的な成長を踏まえた冠詞獲得の過程は、誤用分析に基づいて、段階的に四つのステージに分類される。詳細は友田（2008）に譲るが、冠詞の習得は、混沌とした冠詞使用の第1 期から始まって、聞き手が話し手の情報を共有していない状況であっても子ども特有の自己中心的な発想から定冠詞を多用する第2 期に移行し、その後、不定冠詞を一時的に過剰般化して定冠詞の代わりに用いる第3 期を経て、冠詞をマスターする第4 期に至るとされる。子どもによっては、第3 期をスキップして第4 期に移行するケースもあることから、4 段階仮説においては、子どもが定冠詞の誤用を頻発する第2 期からの移行、すなわち Piaget が主張する「幼児の自己中心的性からの脱却」（中島・岡本・村井, 2002, p. 75）

がもっとも重要な側面とみなされている。4段階仮説の基盤となるのは、Bickerton のパイオプログラム³⁾が主張する「物の見方」であり、とりわけ、対象となる名詞句が「聞き手にとって既知か未知か (presupposedness by the speakers of the hearers' knowledge)」という聞き手の「前提性」の有無が話者に的確に認識されているかどうか、第2期のポイントとなっている。

しかしながら、帰国子女の冠詞使用が4段階仮説を逆行すると仮定した場合、定冠詞の誤用が頻発し第2期の様相を呈したとしても、そのような冠詞使用の喪失傾向が、被験者である帰国子女が自己中心的な発想に回帰することを意味するものではないことは容易に想像出来る。幼児の自己中心性からの脱却は、発達心理学の知見から、一般的に健常児であれば4歳前後とされているため(木下, 2005 ほか)、この年齢を超える帰国子女が再び「赤ちゃん返り」すると考えることは不自然である。このため、第2期の定冠詞の過剰使用は、話者の自己中心性によるものというよりは、むしろ「聞き手の『前提性』の理解」を話者が明確に認識出来ているかどうかによると考えることが出来る。すなわち、L1では問題なく対処出来る、話者による「聞き手の『前提性』の理解」の把握が、帰国子女であってもL2では困難を伴う可能性がうかがえる。

2. 2 L1 幼児、L2 学習者、L2 児童生徒の定冠詞過剰使用

英語母語話者幼児・児童の冠詞習得年齢に関しては、3歳半前後 (Maratsos, 1974, 1976) や9歳前後 (Karmiloff-Smith, 1985; Warden, 1976) と見解が一致していないが、研究対象や方法¹¹⁾が結果に大きく作用することがうかがえる。英語母語話者は幼児であっても一歳前の早い時期から文中の名詞の切り出しに冠詞を初めとする機能語をたくみに利用しているという説からも (Gerken *et al.*, 1990; Gerken & McIntosh, 1993)、冠詞は幼児が会話から必要な情報を得る際、重要な役割を果たしていることは確かである。また、規則動詞の過去形や三人称単数形よりも冠詞は英語母語話者の幼児に早く習得されるという自然主義的観察にのっとった Brown (1973) の指摘が示唆するように、名詞句に対する生得的な「前提性」と「特定性」の理解が、英語母語話者の幼児による冠詞体系の早い時期の習得の一助となっているという説もある (Bickerton, 1981, 1984)。

一方、冠詞の習得がL2学習者にとって課題であることは広く知られている (Butler, 2002; 織田, 2002; Shirahata, 1988 ほか)。冠詞の適切な使用とL2能力には相関¹²⁾が見られるという指摘もあるように (Oller & Redding, 1971)、冠詞は見落とされがちではあるが重要な言語要素である。L1の冠詞体系の有無が冠詞概念の習得に作用することに加え (Oller & Redding, 1971)、簡単に習得出来る基本的なルールだけでは実際の場面における冠詞の適切な選択は難しく、教室内で学習する項目以外の談話内容・文脈・状況の判断や聞き手の「前提性」の理解などが不可欠であることが一因とされる (Pica, 1983a)。とりわけ定冠詞の過剰使用は、日本人学習者を対象とした Butler (2002) や和

泉・井佐原 (2004)、クウェート大学の学生を対象とした Kharma (1984)、またデリー大学の学生を対象とした Agnihotri, Khanna & Mukherjee (1984) 等、多くの研究が指摘するように成人初級 L2 学習者の傾向の一つでもある。

定冠詞多用の要因は様々であるが、一つには文化的背景知識の欠落が聞き手と話し手の間の適切な指示同定を阻み、正確な前提性の理解を阻害する可能性が指摘されている (織田, 2002; Shohamy, 1996)。加えて、L1 からの負の転移も一因とされ、アラビア語のように L1 に冠詞体系を持つ言語話者であっても、定冠詞のみのシステムがある場合、定冠詞を過剰使用することが明らかである (Kharma, 1981; 常木, 1983)。また、日本語のように L1 に冠詞体系が見当たらない場合であっても、指示詞 (その) の代用として定冠詞の過剰使用が引き起こされる可能性も示唆されている (和泉・井佐原, 2004; 常木・茨山, 1977)。

また、帰国子女や移民の子どもの冠詞習得を扱った研究はそれほど多くはないが、中国人移民児童が、カバーする範疇の広い定冠詞を多用することが報告されている (Lee, Cameron, Linton & Hunt, 1994)。帰国子女関連では、先に述べた日本人低学年帰国児童の縦断的な調査から退行仮説の逆行による定冠詞の多用 (友田, 2008) が、更に、主語の位置の冠詞脱落および定冠詞の多用、不定冠詞を定冠詞に聞き間違える傾向が、日本人帰国生徒を対象とした小規模な横断的調査でも指摘されている (Tomoda, 2008)。現地の育児サークルやナーサリーを通じて積極的に英語母語話者の幼児とかかわった帰国児童や現地校で学習経験のある帰国生徒であれば、冠詞をある程度習得していると推測されるが、L2 学習者同様の定冠詞の過剰使用が EFL 環境に帰国した児童生徒の調査結果からうかがえる。このような定冠詞の誤用は、帰国子女であっても冠詞使用の文法規則に関して明示的な教授を受けていないことによる基本的ルール欠損のためであるのか、あるいは基本ルールは理解出来てはいても L2 のために冠詞に対する判断力や注意力が散漫になっているためなのか、それとも、文脈に過剰に依存したり推測を多用したりすること等が要因であるかは、明らかではない。

2. 3 「前提性」の理解と誤信念課題

冠詞の適切な使用の前提ともなる、話者による「聞き手の『前提性』の理解」の把握については、例えば語用論や談話分析などの分野においても、新情報と旧情報がいかに理解され、話者と聞き手の情報内容がどのように共有され交錯するか等さまざまな研究が行われている (神尾, 1990 ほか)。しかしこのようなアプローチを、多数の帰国子女を対象とした横断的調査に用いることは現実的には難しいこともあり、本稿では代わりに発達心理学で用いられる「誤信念課題 (false-belief task)」を L2 で実施することで、「前提性」の理解が L2 使用の負荷等によって影響を受けるかどうかを見極める。

「誤信念課題」は、1980 年代半ばに始まった、心 (mind) の機能や心的世界に関する

「心の理論 (theory of mind)」の獲得の有無を判断するための「リトマス試験紙」とみなされてきたタスクである (木下, 2005, 2006; 内藤, 2007 ほか)。最近では「心の理論」という名称そのものに対して批判⁴⁾も多い研究領域であるが、「誤信念課題」の達成は、信念など他者の心的状態の理解を意味し、「自己ならびに他者のありようは、他者の心的状態を理解したり、自分自身の心的世界を覚知することと不可分な関係」(木下, 2005, p. 58)にあることを理解した上で、「自己と他者が確立されていく」ことから、「言語・認知・社会性の能力」との関連が指摘されている (木下, 2006, p. 34)。健常児は誤信念課題を4歳ないし5歳くらいまでには通過出来るようになるが、自閉症児にはタスクの達成が難しい側面が強調される一方で (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985; Wimmer & Perner, 1983 ほか)、誤信念課題が早期に達成出来ることは「全面的に価値のあること」(木下, 2006, p. 39)という前提⁵⁾に成り立ち、「不意移動課題 (the unexpected transfer test)」であるサリー・アン課題⁶⁾やマキシ課題⁷⁾を基本として、様々に改良を加えられた誤信念課題が開発されてきた。多くの課題が試行される一方で、「誤信念課題」では「子どもはある意味、『観客』席に身を置き、場合によってはすべてお見通しの『神様』視点にたっている」(木下, 2005, p. 66)ため、通常であれば他者の心的状態は自己と他者の係わりの中で予測・理解されていくはずであるのに対して、「誤信念課題」の設定は非日常的であるという批判もある。更に、自閉症児研究からも、「心の理論」の機序を教示され習得してもなお他者とのコミュニケーションに支障をきたす自閉症児の存在は、「心の理論」の限界を示すとも指摘されている (赤木, 2007)。

このように、従来の「誤信念課題」を扱う研究では、自閉症児や健常児が何歳から課題を通過出来るかということを中心に議論が進められてきたが、最近になってこの「誤信念課題」をめぐる「心の理論」の研究は新たな展開を見せている。例えば、日本人幼児・児童など欧米文化圏とは異なる「物のとらえ方」をするアジア・アフリカ圏の被験者の結果¹⁰⁾から、「心の理論」には文化的普遍性が欠落している点が指摘されている (Naito, 2003; 内藤, 2008; Ruffman *et al.*, 1998)。更に、「心の理論」と言語能力の関連が様々な角度から検討されるようになった結果、他者の信念や知識を推測するために、話者である幼児はそれぞれの L1 の特定言語表現を利用する傾向も明らかとなってきている。例えば、聞き手の知識や確信を測るため、英語母語話者幼児は心的動詞 (know, think, guess) や法性表現 (perhaps, maybe) に、日本語母語話者幼児は心的動詞よりも文末助詞 (かな、だって) に依拠することから、使用する言語によって心的状態を探る手掛りが異なることが示唆されている (内藤, 2008; Matsui *et al.*, 2006)。また、複文を構成し理解出来る統語的能力が、他者の信念の予測に有用であるという指摘 (de Villiers & de Villiers, 2000) や、語彙テストと「心の理論」の相関を示唆する研究 (Dunn, 1999) もあり、「言語の意味を理解」する能力と「心の理論」の関連が指摘されている (木下, 2005, p. 68)。

以上から、「心の理論」ないしその「リトマス試験紙」である「誤信念課題」は、「他

者の信念の理解」を測るだけでなく、被験者の文化の違いや言語能力を認識する、「心」を覗く窓というように考えることも出来る。帰国子女の場合は、欧米文化圏で一定期間を過ごした経験があり、「誤信念課題」の背景となる、西洋的に正しいとされる人間関係の枠組や論理の運び方を、完全ではないとしても理解する糸口はつかんでいるはずである。L1 で健常児が「誤信念課題」を通過出来るとされる年齢を超えているにも関わらず、帰国子女が「誤信念課題」が通過できないのであれば、それは L2 の言語能力の喪失によるものか、あるいは L1 でも「他者の信念」を予測出来ないかのどちらかであろう。「他者の信念」が理解出来ないということは、冠詞の適切な使用に不可欠な「聞き手の『前提性』の理解」にも重なる点である。「他者の信念」とは、すなわち、聞き手が指示同定的前提としている根拠を話者が予測出来ないということであり、とりわけ定冠詞を正しく使用するには、この予測が必要となる。

3. 研究課題

以上の先行研究から、帰国子女の定冠詞の過剰使用は4段階仮説を逆行した結果であると同時に、L2 学習者の誤用との類似が示唆されたが、本稿では先行研究で引用した実験の追試を帰国子女に実施し、以下を検証する。

1. 聞き手の「前提性」がない場合は不定冠詞を使用し、「前提性」が有る場合は定冠詞を使用するなどの冠詞使用の基本ルールを帰国子女はどの程度認識しているか。
2. 実際の冠詞使用場面においても、帰国子女は（文脈に過剰依存したり、推測を多用したりするのではなく）冠詞の基本的ルールを指摘出来るか。
3. 「他者（聞き手）の『前提性』の理解」を理解するのに十分な L2 語彙力を帰国子女は維持しているか。
4. 「他者（聞き手）の『前提性』の理解」を帰国子女は L2 で示すことが出来るか。
5. 「他者（聞き手）の『前提性』の理解」を帰国子女が L2 で示さない場合 L1 で示すか。

4. 調査方法

4. 1 被験者

被験者は、義務教育就学前および小学校低学年・中学年で帰国した小学校4年生の日本人児童16名である。被験者は、主として財団法人海外子女教育振興財団の外国語保持教室に通う児童¹³⁾で、外国語保持教室の資料や被験者・保護者とのインタビューから被験者の家庭環境、保護者の職業、海外での学習環境¹⁴⁾、英語保持の動機などが類似していると推測出来た。小学校4年生を調査対象としたのは、英語母語話者児童は9歳前後には冠詞を習得出来るとする説¹⁵⁾ののっとり、9歳ないし10歳をターゲットとしたこ

とによる (Warden, 1976; Karmiloff-Smith, 1985)。内藤 (2008) によると、日本人幼児・児童が「誤信念課題」を通過出来る年齢は4歳から7歳と、欧米圏の幼児・児童に比較して遅いが、9歳もしくは10歳の日本人帰国子女であれば「誤信念課題」を達成出来ると考えられる。

| 被験者 | 滞在先国 | 出国年齢 | 帰国年齢 | 滞在期間 | 英検取得級 | 性別 | 兄弟 |
|-----|--------|-------|------|------|-------|----|------|
| 1 | 米国 | 海外で誕生 | 5:3 | 5:3 | 2 | m | 兄 |
| 2 | 米国 | 海外で誕生 | 3:4 | 3:4 | 3 | m | 姉 |
| 3 | 米国 | 5:1 | 6:11 | 1:10 | 2 | f | 妹 |
| 4 | 米国 | 4:4 | 7:8 | 3:4 | 無 | f | 兄 |
| 5 | 米国 | 3:8 | 6:1 | 2:5 | 3 | m | 兄 |
| 6 | 米国 | 3:8 | 6:1 | 2:5 | 3 | m | 弟 |
| 7 | 米国・豪 | 海外で誕生 | 6:5 | 6:5 | 2 | m | 一人っ子 |
| 8 | 米国 | 3:11 | 5:8 | 2:9 | 無 | m | 姉・妹 |
| 9 | 米国 | 5:2 | 9:2 | 4:0 | 2 | m | 兄・妹 |
| 10 | 米国 | 5:7 | 9:6 | 3:11 | 無 | f | 姉 |
| 11 | 米国 | 6:1 | 8:3 | 2:2 | 無 | m | 妹 |
| 12 | 米国 | 5:1 | 8:11 | 3:10 | 準1 | m | 弟・妹 |
| 13 | 米国 | 5:5 | 9:1 | 3:8 | 無 | m | 一人っ子 |
| 14 | 米国 | 7:10 | 9:10 | 2:0 | 2 | m | 妹 |
| 15 | シンガポール | 4:0 | 7:2 | 3:2 | 準2 | f | 姉 |
| 16 | アラブ首長国 | 0:2 | 9:2 | 9:0 | 2 | f | 姉 |
| 平均 | | 3:9 | 7:4 | 3:7 | | | |

注)数値は年齢もしくは年数を示す。例えば5:3は5歳3ヶ月ないし5年3ヶ月を意味する。

表1 被験者データ

4. 2 調査方法

本稿では、先行研究に鑑み、研究課題1および2ではTomoda (2008) の追試を実施した。冠詞の基本ルールの確認には1500語彙レベルのストーリー¹⁶⁾の穴埋め問題を使用し、冠詞使用場面における基本的ルール以外の手掛かりの探索には、Maratsos (1976) の中から性差による嗜好が現れにくいと思われるStory 1とStory 3¹⁷⁾を英語母語話者がテープレコーダに吹き込んだ内容を被験者に聞かせ、該当する絵の選択と選択理由を尋ねた。選択根拠の説明は日本語・英語どちらでも被験者の好む言語の使用を許可した。研究課題3には、米国で使用される英語母語話者の幼児・児童・生徒向けの語彙テスト¹⁸⁾を用いて語彙力を測定し該当する年齢を算出した。研究課題4と5には「誤信念課題」のサリー・アン課題¹⁹⁾をL2で試行し、通過できなかった場合は「最後の英語の質問 (Where will Sally look for the ball?) を日本語に直すとどういう意味か説明して下さい」と質問内容の理解を確認した上で、マキシ課題をL1で試行した。「誤信念課題」以外は被験者が要求すれば何度でも録音を聞くことが出来た。

5. 結果

5. 1 冠詞使用の基本ルールと語彙テスト

冠詞穴埋め問題のTLU値と帰国年齢²⁰⁾には強い正の相関が見られた ($r=.7503$)。表2のTLU値と冠詞聞き取り課題 (椅子、ウサギ) の結果が示すように、必ずしもTLU値

の高低と冠詞聞き取り課題の正答率は一致していない。TLU 値と語彙テストの語彙該当年齢には強い正の相関が見られ ($r=.709$)、帰国年齢と語彙該当年齢には弱い正の相関が見られた ($r=.537$)。このことから、冠詞の基本的ルールの認識と、帰国時の年齢および語彙該当年齢には関連が見出されたが、基本的ルールが理解出来ていたとしても、小学校 4 年生の帰国児童は、聞き取り課題の際には、表 3 および表 4 が示すように、正解した被験者であっても冠詞のルールの理解の提示というよりはむしろ他の手掛かりに多大に依存する可能性が示唆された。

| 被験者 | TLU値 | 椅子 | ウサギ | 語彙年齢 | サリー・アン | マキシ |
|-----|------|-------|-----|------|--------|-----|
| 1 | 40 | ○ | ○ | 3;7 | ○ | |
| 2 | 53 | ○ | ○ | 6;3 | ○ | |
| 3 | 88 | ○ | × | 7;11 | ○ | |
| 4 | 76 | ○ | × | 4;6 | ○ | |
| 5 | 53 | × | ○ | 2;10 | ○ | |
| 6 | 53 | ○ | × | 3;7 | × | ○ |
| 7 | 71 | ○ | ○ | 6;2 | ○ | |
| 8 | 47 | ○ | × | 2;11 | ○ | |
| 9 | 82 | ○ | × | 6;3 | × | ○ |
| 10 | 88 | ○ | ○ | 6;7 | × | × |
| 11 | 94 | ○ | × | 6;2 | ○ | |
| 12 | 82 | ○ | ○ | 8;7 | ○ | |
| 13 | 76 | × | ○ | 6;5 | ○ | |
| 14 | 71 | ○ | × | 7;7 | × | ○ |
| 15 | 76 | × | ○ | 4;10 | × | ○ |
| 16 | 88 | ○ | × | 6;3 | ○ | |
| 平均 | 71 | 81.25 | 50 | 5;5 | 68.75 | |

注)椅子課題、ウサギ課題、サリー・アン課題の一番下の数値は正答率。

表 2 冠詞穴埋め TLU 値と冠詞課題、語彙テスト、誤信念課題の結果のまとめ

| 理由/ 被験者 | TLU値 | 正解 | | | | | 不正解 | | 性別 |
|------------|-------|----------|----|--------|-------|----|--------|----|----|
| | | 椅子 指摘 | 推測 | 名詞への言及 | 自然の摂理 | 不明 | 名詞への言及 | 不明 | |
| 1 | 40.00 | ○ | | | | | | | m |
| 2 | 52.94 | ○ | | | | | | | m |
| 3 | 88.24 | ○ | | | | | | | f |
| 4 | 76.47 | ○ | | | | | | | f |
| 5 | 52.94 | × | | | | | | ○ | m |
| 6 | 52.94 | ○ | | | | | | | m |
| 7 | 70.59 | ○ | | | | | | | m |
| 8 | 47.05 | ○ | | ○ | | | | | m |
| 9 | 82.35 | ○ | | | | | | | m |
| 10 | 88.24 | ○ | | | | | | | f |
| 11 | 94.12 | ○ | | | ○ | | | | m |
| 12 | 82.35 | ○ | | | | | | | m |
| 13 | 76.47 | × | | | | | ○ | | m |
| 14 | 70.59 | ○ | | | | | | | m |
| 15 | 76.47 | × | | | | | ○ | | f |
| 16 | 88.24 | ○ | | | | | | | f |
| 合計 | | 3 | 7 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | |

表 3 冠詞課題 (椅子) の結果の詳細

| 理由/ 被験者 | ウサギ TLU値 | 正解 | | | 不正解 | | | 性別 |
|------------|-------------|------|--------------------------------|------------------------------|------|----------------------------------|---|----|
| | | 冠詞指摘 | 名詞の属性 赤いうさぎと言っていない/他のウサギだから | 不明 何となく /elephant backだから | 冠詞指摘 | 名詞の属性 赤いリボンのウサギだから/ハローって言ったから | | |
| 1 | 40.00 | ○ | | ○ | | | m | |
| 2 | 52.94 | ○ | ○ | | | | m | |
| 3 | 88.24 | × | | | | ○ | f | |
| 4 | 76.47 | × | | | | ○ | f | |
| 5 | 52.94 | ○ | | ○ | | | m | |
| 6 | 52.94 | × | | | | ○ | m | |
| 7 | 70.59 | ○ | ○ | | | | m | |
| 8 | 47.05 | × | | | | ○ | m | |
| 9 | 82.35 | × | | | ○ | | m | |
| 10 | 88.24 | ○ | ○ | | | | f | |
| 11 | 94.12 | × | | | | ○ | m | |
| 12 | 82.35 | ○ | ○ | | | | m | |
| 13 | 76.47 | ○ | ○ | | | | m | |
| 14 | 70.59 | × | | | | ○ | m | |
| 15 | 76.47 | ○ | ○ | | | | f | |
| 16 | 88.24 | × | | | | ○ | f | |
| 合計 | | | 2 | 4 | 2 | 1 | 7 | |

表4 冠詞課題（ウサギ）の結果の詳細

表3 および表4の冠詞課題の結果を元に、TLU値の高低によって帰国児童の聞き取りの手掛かりを分類すると、いずれの課題においても使用された冠詞を指摘出来たのはTLU値の高い被験者であった。TLU値が低い帰国児童は、根拠をうまく言語化することが難しかった。

5. 2 誤信念課題

表2から、小学校4年生の帰国児童の場合、語彙テストの語彙該当年齢の高低が必ずしも「誤信念課題」の結果に影響しないことが読み取れるが、これは語彙テストと「心の理論」の相関を示唆する研究とは異なる結果となった。L2でサリー・アン課題が通過出来ない被験者に、最後のL2の質問内容の理解の確認をL1で行ったが、達成出来なかったいずれの被験者も「サリーのボールはどこにありますか」「サリーはボールをどこで見つけられますか」など、問題文を正確に聞き取ることをせずに思い込みから回答していることが示唆された。また、L1でもマキシ課題を唯一通過出来なかった被験者10はL1でも同様の誤った根拠（「お母さんが冷蔵庫に置いたから」）を理由として挙げ、問題文をL1でも正確に聞き取っていないことを示した。「マキシは帰宅してチョコを食べる為にどこを探すと思うか」という問いには正解したことから、「誤信念課題」のポイントである他者の信念の理解は確認された。

6. 考察

4段階仮説を退行することから顕在化する、帰国子女の定冠詞過剰使用の原因解明が

本稿の目的であるが、以下のような小学校 4 年生の帰国児童の言語特徴が明らかになった。

1. 帰国年齢の高い児童の冠詞 TLU 値が高いことは、冠詞使用の基本ルールの理解が深いことを示唆する。
2. 実際の冠詞使用場面においては、基本的ルールが理解出来ていても、聞き取り課題の際に正解した帰国児童でさえも、冠詞のルールの理解というよりはむしろ他の手掛かりに多大に依存する可能性が示唆された。特に、TLU 値の高低によって、手掛かりを言語化することに差異が見られた。
3. 語彙該当年齢と冠詞 TLU 値には相関があることから、L2 語彙力は正しい冠詞使用と関連があり、「他者（聞き手）の『前提性』の理解」を認知出来ていると推測される。
4. 誤信念課題の結果、「他者（聞き手）の『前提性』の理解」を帰国児童は L2 でも L1 でもほぼ認識出来た。誤信念課題を L1 ないし L2 で通過出来ない場合は、「前提性」の欠如というよりはむしろ不十分な言語能力から引き起こされる文章の理解不足によると思われる。

以上の結果から、小学校 4 年生の帰国児童の冠詞使用とその判断基準となる手掛かりの一端が明らかとなった。従来の言語喪失研究においては、主として、どのような言語要素が喪失されるか、もしくはどのような順番で喪失されるかに焦点を当てられてきたが、「なぜそう思ったのか」と被験者のメタ言語的能力を問うことで、L2 喪失の補完として何を使用するのか、その多様性が示された。TLU 値の高低によって L2 喪失の補完となる手掛かりに差異が現れたのもまた発見であった。「誤信念課題」を通過出来なかった被験者は、L2 であっても L1 であっても不十分な言語能力によって文章の理解力が損なわれたと考えるのが自然ではあるが、この被験者に特有の特徴も踏まえた上で、以下に考察を試みる。

6. 1 聞き取り課題の手掛かり

帰国児童が、冠詞の聞き取り課題において、冠詞の基本ルール以外にも如何に多様な手掛かりを駆使して課題に取り組んでいるかは驚くばかりである。冠詞の基本的なルールに言及した帰国児童（被験者 7, 10, 12, 16）の TLU 値は高いが、必ずしも TLU 値の高い被験者すべてが基本ルールを指摘出来た訳ではない。ウサギ課題において不定冠詞を定冠詞と聞き間違えた児童（被験者 9）も TLU 値は高く、ウサギ課題がやや実験的で不自然な点を、自らの高い L2 能力で修正し新たな課題文を作成したとも考えることが出来る。TLU 値が高くとも冠詞のルールを指摘出来なかった被験者に、例えば出国年齢や滞在期間など、何らかの共通の特徴は今のところ見出すことは難しく今後の課題である。

椅子課題において正解してはいるが、冠詞のルールの適応ではなく、テキスト言外の知識を用いて「椅子が自然に倒れることはない」と指摘した被験者（被験者 11）のコメントは独創的である。椅子が倒れるという簡単な状況であっても如何に児童が様々な条件を勘案して取り組んでいるかがうかがえる。また、正解しながらも「他の椅子が倒れたとは言っていない」と述べた被験者（被験者 8）や、不正解であっても「彼女の椅子が倒れたと言っていないから他の椅子が倒れた」点に言及した被験者（被験者 13, 15）の TLU 値にはバラツキが見られ共通する特徴も見当たらないが、タスク試行の手順として、被験者に 3 枚の絵を示し、「この絵からストーリーが始まります。これから聞くお話が残り 2 枚の絵のうちどちらを指しているか、録音されたお話を聞いてから教えて下さい」という指示を実験者が与えるため、例えば椅子課題の絵（女の子が椅子に座っている絵、女の子が椅子と一緒に倒れている絵、座っている女の子の前の椅子が倒れている絵）を目の前にした被験者が、絵の内容につられて、「どの椅子が倒れるか否か」に集中してストーリーを聞いたことも十分に理解出来る。冠詞の基本ルールは指摘出来なくとも、日常生活で起きると思われる椅子課題においては、「椅子が倒れるか」に集中した帰国児童の手掛かりのとらえ方は、日常生活で L2 を用いる際にも非常に有効な手法であろう。同様に、ウサギ課題において不正解であった被験者（被験者 3, 4, 6, 8, 9, 11, 14, 17）には、例外（被験者 6, 8）はあるが TLU 値が高い児童が多い。最初に耳にした「挨拶する赤いウサギ」をストーリーにおいて重要な役割を担う登場人物ととらえ、その動向に注目することも、実社会の中で L2 を利用する際の必要な方略であり、L2 能力の補完として理解出来る。このような帰国児童が用いる冠詞の基本ルール以外の様々な手掛かりは、実際に生活言語として L2 を用いてきた被験者が、L2 退行が進む中で見出した帰国子女の方略の一つであろう。

このような冠詞の基本的ルール以外の手掛かりへの依存が先に述べたトレードオフ効果によるものであるかについては、この冠詞聞き取り課題だけで不十分であるため、今後の課題として残される。

6. 2 誤信念課題の手掛かり

帰国児童が「誤信念課題」を通過出来ない理由が、「前提性」の欠如というよりはむしろ不十分な言語能力から引き起こされる文章の理解不足によるものであることは実験結果から明らかである。しかしながら、非常に単純な質問文であるにも関わらず、質問の意味を取り違えるという理解力不足がなぜ起きるかについては、本稿の実験だけでは明らかにすることは出来ない。「誤信念課題」は別の課題²¹⁾と共に試行すると通過率が下がることが明らかとなっている（Gordon & Olson, 1998）が、このトレードオフ効果に近い状況が、L2 を使用する「誤信念課題」の質問文の理解においても起きていたと考えることも出来る。L1 でも「誤信念課題」が通過出来なかった被験者 10 の TLU

値は 88.24 と高く、現地校で図工の賞を得るなど現地の学校生活にも非常になじんでいたが、どちらかといえば静かな性格で、聞き取り課題も 2 回要求するなど慎重であった。被験者 10 がなぜ L1 でも L2 でも簡単な質問文を取り違えたかは推測の域を出ないが、日常生活の中で L2 を獲得したと思われる帰国児童の場合、「外で遊ぶよりも一人で図工の方が好き」と答えたこの被験者は、遊びを通して学ぶ他者との関わりを基本とした生活言語としての L2 の獲得が若干遅れた可能性も否めない。

7. 結論と今後の課題

帰国児童の定冠詞過剰使用がなぜ引き起こされるかを解析することが本稿の目的であったが、冠詞使用の基本ルール以外にも様々な手掛かりを用いて L2 退行を補完していることが示唆された。更に、「誤信念課題」そのものは理解出来ても、単純な内容であるにも関わらず L2 では質問文の意味の取り違えが起きるなど、L2 の負荷が観察された。

今後は、明示的な冠詞規則の教示を受けた年長の帰国生徒も同様な手掛かりを L2 言語使用の際に用いるか等も含め、さらに被験者を増やしデータ収集と実験を試み、分析を行いたい。

註

本調査に御協力下さった財団法人海外子女教育振興財団の関係各位ならびに財団主催の外国語保持教室に通う帰国児童・生徒、保護者の皆様方に感謝の意を表します。

- 1) 文法的な正確さを示す値は Target-like Usage (TLU) 値と呼ばれ、その算出には Pica (1983b) が Brown (1973) の評価方式を元に提唱した形態素推量化方式が適応される。
- 2) トレードオフ効果とは、複雑さが上がれば正確さが下がるような、測定項目に負の相関関係が見られることを云う (Foster & Skehan, 1996)。友田 (2007) においても、年少帰国児童の動詞使用に際して、動詞の誤りと動詞総発話数および発話構造の複雑性にトレードオフ効果が見られた。
- 3) Bickerton (1981, 1984) のバイオプログラムはクレオール語に見られる普遍的な「特定性」「前提性」の「物の見かた」が生得的であると主張した。
- 4) 木下 (2005, 2006)、内藤 (2008) など多くの研究が指摘するように、日本語の「心 (mind)」には「情動」や「感情」が含意されるのに対し、「心の理論 (theory of mind)」が扱うのは欧米文化圏の成人が正しいと考える対人関係の枠組を認知的に理解する能力にすぎないという批判がある。
- 5) 木下 (2006) が指摘するように、「早期から他者の心に気づく能力を得て、他者の心中を気づかう状態におかれた幼児は、たいへん生きにくい生活をすごしている」という、「心の理論」が発達した幼児ほど集団生活の中では教師を含む他者の目や評価が気になり、子どもらしい自由な活動が阻害されているという報告もある。
- 6) Baron-Cohen *et al.* (1985) が考案したサリー・アン課題 (Sally-Ann Task) は、Wimmer & Perner (1983) の不意移動課題 (マキン課題) を「より短くより単純な形に修正し、年齢の高い子どもに合うように」変化させたタスクで (ミッチェル, 2000, p. 105)、不在中に自分が置いたビー玉の場所を換えられた女の子がそれを知らないはずであることを指摘出来るかがポイント。

トである。登場人物はサリーとアンと呼ばれる 2 つの人形で、サリーはかごを、アンは箱を持っている。サリーがビー玉をかごに入れその場を離れている間に、アンが箱にビー玉を移し換える。サリーが戻ってきてビー玉を探す、それを観察していた参加児は、サリーがどこを探すかを指摘しなければならない。Baron-Cohen *et al.* (1985) はサリー・アン課題を健常児と自閉症児に試行し、健常児は 4 歳半で課題を通過出来たのに対し、80%の自閉症児がサリーがビー玉が今ある場所を探す間違った判断を下したことから、「誤信念課題」で測られる「心の理論」の欠損が（「反復行動」などを除く）自閉症児の一時的障害を説明出来るとした。

- 7) Wimmer & Perner (1983) が考案したマキシ課題 (Maxi and the chocolate scenario) は、マキシと呼ばれる少年が置いた板チョコを、不在中に母親が移動させたことをマキシが理解しているかを被験者に問う内容である。マキシの家のキッチンを舞台に、後で食べようとマキシが緑の整理箱の中に板チョコを入れて遊びに出かけている間に母親が現れる。ケーキ作りのために板チョコが少し必要な母親は、緑の整理箱から板チョコを取り出し使った後で残りを青の整理箱に戻す。その後、マキシが帰宅して板チョコの残りを食べたいと思う。そのやりとりを見ていた被験者である参加児に、マキシがチョコを求めてどこを探すのかを尋ねる課題である。Wimmer & Perner (1983) の結果は、4 歳・5 歳児は「マキシはチョコレートがどこにあるかと思っているか」というよりも「マキシのチョコレートはどこか」と尋ねられているように答え、6 歳・7 歳児の子どものほとんどはマキシが事実を知らないことを勘案し、マキシは緑の整理箱を探す判断した (別府, 2001; ミッチェル, 2000)。パイロット調査の結果、整理箱にチョコレートを入れる不自然さを回避するために、本稿ではカップボードと冷蔵庫の設定に修正して試行した。
- 8) 内藤 (2008) が指摘するように、日本の子どもは誤信念課題の通過年齢が欧米諸国 (2.5 歳から 5 歳) に比べて 4 歳から 7 歳と極めて遅いことに加えて、課題の解き方も「最初にそこに置いたから」など登場人物の行動に基づいており、「欧米の子どもにも典型的な、知識や知覚経験に基づく説明は非常に稀」であることが特徴として挙げた。
- 9) Maratsos (1974, 1976) は、Brown の自然観察に近い手法を採用し、主として 4 歳までの幼児を対象に、幼児でも理解可能な単純なストーリーに様々な冠詞を組み込ませた実験を重ね、3 歳半前後で冠詞体系の習得を確認した。一方、Warden (1976) らは、既出・未出の動物や物体が登場する 4 コマ漫画を 5 歳と 9 歳の子どものに語らせた結果、冠詞の体系的な習得は 5 歳では難しいことを指摘している。このように、研究対象や手法が異なった結果、冠詞体系の習得の年齢に差異が現れたと考えられる。
- 10) L1 に冠詞と同様の体系がある場合は、L2 能力と冠詞使用には統計的に有意な相関があったが、L1 に冠詞体系がない言語話者の場合は、相関傾向は見られても統計的には有意ではなかった。
- 11) 財団法人海外子女教育振興財団の主催する外国語保持教室に通室する児童のうち、保護者の承諾のとれた児童を対象とした。
- 12) 被験者は、米国・豪州に滞在の場合は全員が現地校に通学し、補習校ではなく日本から進出した塾に通っていた。シンガポールとアラブ首長国連邦の場合は、国際校のみに通学していた。
- 13) 註 9 でも言及したように、英語母語話者幼児・児童の冠詞習得の年齢については 3 歳半前後や 9 歳前後など諸説あるが、本稿では遅い年齢を採用した。
- 14) Hill's Intermediate stories 2 (1977) の簡単なストーリーは、図書館に本を返した男性と司書の会話が主体であるが、パイロット調査の結果、小学校 4 年生の帰国子女 1 名が理解出来なかった persuaded を pushed に変更した。全文は Tomoda (2008) Appendix I に掲載した。冠詞穴埋めテストの結果は、註 1 にも言及のある TLU 値で示した。

- 15) Maratsos (1976, p. 36, 37) の Story 1 は、部屋に入ってきた女の子が椅子に座るとその椅子 (the chair falls over) が倒れるという内容で、Story 3 は、四羽のウサギの一羽がライオンとトラと挨拶 (One of the bunnies went over to the tiger. He said hello to the tiger. Now a bunny went over....) をかわして背中に乗るという内容である。Story 3 はパイロット調査で「ウサギがライオン(トラ)に食べられるかもしれない」など、調査対象以外の内容をコメントする被験者がいたため、Tomoda (2008) および本稿ではライオンとトラは象に変更した。また、Maratso では、定冠詞・不定冠詞の二つのバージョンが使用されているが、パイロット調査の結果、Tomoda (2008) および本稿では、椅子課題を定冠詞、ウサギ課題を不定冠詞に限定して使用し、カウンターバランスを考慮して被験者には交互の試行を行った。全文は Tomoda (2008) Appendix III に掲載した。
- 16) 語彙テストには American Therapy Publications の Expressive One-Word Picture Vocabulary Test を使用して語彙該当年齢を算出した。パイロット調査の結果、24 番の wagon、76 番の wheelbarrow、96 番の banjo は米国以外から帰国した児童・生徒には馴染みがないため、計算から除外した。
- 17) 本来、サリー・アン課題ではビー玉 (a marble) を用いているが、パイロット調査の結果、ストーリーをより分かりやすくするため、ボール (a ball) に変更して試行した。
- 18) 年齢及び年数の場合は月齢や月数に直して統計処理を行った。
- 19) 数を数える、大きな音の拍を聴くなどが別の課題として挙げられている。

参考文献

- Agnihotri, R. K., Khanna, A. L., & Mukherjee, A. (1984). The use of articles in Indian English: Errors and pedagogical implications. *IRAL: International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 22, 115-129.
- Andersen, R. W. (1982). Determining the Linguistic Attributes of Language Attrition. In D. Lambert & B. F. Freed (Eds.), *The Loss of Language Skills* (pp. 83-118). Rowley: Newbury House.
- Bahrlick, H. (1984). Fifty Years of Second Language Attrition: Implications for Programmatic Research. *The Modern Language Journal*, 2, 105-118.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*, 21, 37-46.
- Berko-Gleason, J. (1982). Insights from Child Language Acquisition for Second Language Loss. In R. D. Lambert & B. F. Freed (Eds.), *The Loss of Language Skills* (pp. 13-23). Massachusetts: Newbury House.
- Bickerton, D. (1981). *Roots of Language*. Ann Arbor: Karoma Publishers, Inc.
- Bickerton, D. (1984). The language bioprogram hypothesis. *The Behavioral and Brain Sciences*, 7 (2), 173-221.
- Brown, R. (1973). *A First Language: The Early Stages*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Butler, Y. G. (2002). Second Language Learners’ Theories on the Use of English Articles: An Analysis of the Metalinguistic Knowledge by Japanese Students in Acquiring the English Article System. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 451-480.
- Cohen, A. D. (1975). Forgetting a Second Language. *Language Learning*, 25 (1), 127-138.
- Cziko, G. (1986). Testing the Language Bioprogram Hypothesis: A Review of Children’s Acquisition of Articles. *Language*, 62 (4), 878-898.
- de Villiers, J., & de Villiers, P. A. (2000). Linguistic determinism and the understanding of false beliefs. In P. A. Mitchell & K. J. Riggs (Eds.), *Children’s reasoning and the mind* (pp. 191-228). Hove, UK:

Psychology Press.

- Dunn, J. (1999). Siblings, friends, and the development of social understanding. In W. A. Collins & B. Laursen (Eds.), *Relationships as developmental contexts*. (pp. 263-279). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Foster, P., & Skehan, P. (1996). The Influence of Planning and Task Type on Second Language Performance. *Studies in Second Language Acquisition*, 18 (3), 299-323.
- Gerken, L., Landau, B., & Remez, R. E. (1990). Function Morphemes in Young Children's Speech Perception and Production. *Developmental Psychology*, 26 (2), 204-216.
- Gerken, L., & McIntosh, B. J. (1993). Interplay of Function Morphemes and Prosody in Early Language. *Developmental Psychology*, 29 (3), 448-457.
- Gordon, A. C. L., & Olson, D. R. (1998). The relation between acquisition of a theory of mind and the capacity to hold in mind. *Journal of Experimental Child Psychology*, 68, 70-83.
- Hill, L. A. (1977). *Intermediate Stories for Reproduction 2*: Oxford University Press.
- Jakobson, R. (1968). *Child Language, Aphasia, and Phonological Universals*. Hague: Mouton.
- Karmiloff-Smith, A. (1985). Language and cognitive processes from a developmental perspective. *Language and cognitive processes*, 1 (1), 61-85.
- Kharm, N. (1981). Analysis of the errors committed by Arab university students in the use of the English definite/indefinite articles. *IRAL: International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 19, 333-345.
- Lee, K., Cameron, C. A., Linton, M. J., & Hunt, A. K. (1994). Referential place-holding in Chinese children's acquisition of English articles. *Applied Psycholinguistics*, 15, 29-43.
- Maratsos, M. P. (1974). Preschool Children's Use of Definite and Indefinite Articles. *Child Development*, 45, 446-455.
- Maratsos, M. P. (1976). *The Use of Definite and Indefinite Reference in Young Children: An Experimental Study of Semantic Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsui, T., Yamamoto, T., & McCagg, P. (2006). On the role of language in children's early understanding of others as epistemic beings. *Cognitive Development*, 21, 158-173.
- Naito, M. (2003). The relationship between theory of mind and episodic memory: Evidence for the development of autoeic consciousness. *Journal of Experimental Child Psychology*, 85, 312-336.
- Oller, J. W., & Redding, E. Z. (1971). Article Usage and Other Language Skills. *Language Learning*, 21 (1), 85-95.
- Olshtain, E. (1989). Is Second Language Attrition the Reversal of Second Language Acquisition? *Studies in Second Language Acquisition*, 11 (2), 151-165.
- Pica, T. (1983a). The Article in American English: What the textbook don't tell us. In S. D. Krashen & R. C. Scarcella (Eds.), *Issues in Second Language Research* (pp. 222-233). Rowley, Massachusetts: Newbury House Publishers, Inc.
- Pica, T. (1983b). Methods of Morpheme Quantification: Their Effect on the Interpretation of Second Language Data. *Studies in Second Language Acquisition*, 6 (1), 69-78.
- Reetz-Kurashige, A. (1999). Japanese Returnees' Retention of English Speaking Skills: Changes in Verb Usage over Time. In L. Hansen (Ed.), *Second Language Attrition in Japanese Contexts* (pp. 21-49). New York: Oxford University Press.
- Ruffman, T., Perner, J., Naito, M., Parkin, L., & Clements, W. (1998). Older (but not younger) siblings facilitate false belief understanding. *Developmental Psychology*, 34, 161-174.
- Shirahata, T. (1988). The Learning Order of English Grammatical Morphemes by Japanese High School Students. *JACET Bulletin*, 19, 83-102.

- Shohamy, E. (1996). Competence and performance in language testing. In G. Brown, K. Malmkjaer & A. Williams (Eds.), *Performance and competence in second language acquisition* (pp. 136-151). Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Thomas, M. (1989). The acquisition of English articles by first- and second-language learners. *Applied Linguistics*, 10, 335-355.
- Tomoda, M. (2008). Article usage in the language of Japanese returnee children. *Bulletin of Foreign Language Teaching Association*, 12, 64-83.
- Warden, D. A. (1976). The Influence of Context on Children's Use of Identifying Expressions and References. *British Journal of Psychology*, 67 (1), 101-112.
- Weltens, B., & Cohen, A. D. (1989). Language Attrition Research: An Introduction. *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 127-133.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- 赤木和重 (2007) 「発達、障害、進化が交差するものとしての自閉症」夏堀睦・加藤弘通 (編) 『心理学理論ガイドブック』 p.123-132. 京都：ナカニシヤ出版
- 和泉絵美・井佐原均 (2004) 「日本人英語学習者の英語冠詞習得傾向の分析」和泉絵美・内元清貴・井佐原均 (編) 『日本人 1200 人の英語スピーキングコーパス』 131-139. 東京：アルク
- 織田稔 (2002) 『英語冠詞の世界：英語「もの」の見方と示し方』東京：研究社
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館
- 木下孝司 (2005) 「幼児期における時間的拡張自己と『心の理論』－時間的視点からの理論的考察－」『心理科学』 25 (1) , 58-73.
- 木下孝司 (2006) 「認知発達研究からみた乳幼児研究の動向と今後の課題」『教育心理学年報』 45, 33-42.
- 常木清・茨山良夫 (1977) 「大学生における冠詞使用上の特徴」『中部地区英語教育学会紀要』6, 24-30.
- 常木清 (1983) 「英語冠詞に関する誤答分析の一例：アラブ人学生と日本人学生の誤答の違いについて」『研究紀要：富山医科薬科大学一般教育』 5, 45-58.
- 友田路 (2007) 「外国語保持教室における低学年帰国子女の第二言語喪失：動詞句 TLU 値分析と退行仮説の観点から」『言語情報科学』 5, 147-164.
- 友田路 (2008) 「年少日本人帰国児童の冠詞使用-前提性と特定性の観点から-」『言語情報科学』 6, 227-246.
- 中島誠・岡本夏木・村井潤一 (1999) 『シリーズ人間の発達 7:ことばと認知の発達』東大出版会
- 内藤美加 (2007) 「心の理論研究の現状と今後の展望」『児童心理学の進歩』 46, 2-37.
- 別府哲 (2001) 『自閉症幼児の他者理解』京都：ナカニシヤ出版
- ミッチェル, ピーター、菊野春雄・橋本祐子 (訳) (2000) 『心の理論への招待』ミネルヴァ書房